二〇一二年度　将来展望講座（第二回）

「塾高での学び―社会での仕事」

君たちの未来、日本の未来

公益財団法人日伊協会 名誉会長　英　正道 氏

■講演者プロフィール

英　正道（はなぶさ　まさみち）

一九三三年　東京生まれ

略歴

一九四〇年　慶應義塾幼稚舎入学
一九五二年　慶應義塾高等学校卒業（第3期）
一九五六年　慶應義塾大学経済学部卒業
一九五八年　慶應義塾大学大学院法律科修了
外務省入省
ニューヨーク総領事、外務報道官を経て
一九九三年　駐イタリア大使（～一九九七年）
一九九五年　イタリアにおける「日本年」の成功に尽力（～一九九六年）
一九九七年　鹿島建設株式会社常任顧問
二〇〇一年　日本における「イタリア年」を成功に導く
現　在　公益財団法人日伊協会名誉会長
一般社団法人日本英語交流連盟名誉会長

著書

『君は自分の国をつくれるか（憲法前文試案）』
『Trade Problems between Japan and Western Europe』
等

はじめに

駒村（校長） 校長の駒村です。昨年、前任者の大谷校長のときに始まった塾高の企画、将来展望講座が本日その第二回目を迎えました。この将来展望講座の意義は、福澤先生の訓戒にある「人生でいちばん寂しいことは仕事のないことである」を念頭に置いております。福澤先生は、仕事に対して非常に大きな意義を与えていました。それは同時に、慶應義塾が実学の府であるという認識と不可分に結びついていると思います。

高等学校はご存じのように男子だけの大規模校ということもあり、私も四月から赴任してようやく慣れてきたところですが、非常に大きい高校です。基本的には福澤精神の「気品の泉源、智徳の模範」を精神的柱にして、教育や課外活動をしているところです。しかし、よく考えてみると、将来設計、つまりどういう仕事に就くのか、どのように進路選択をするのか、という指導は、実はそれほど行われていません。

ですから、仕事という言葉を今風に言えばキャリアになるわけですが、キャリアプランやキャリアモデルを示す必要があるだろう。その中でみんなが、自分にとって適性がある、好奇心がわく、あるいは憧れる、進路を選択してほしいのです。

前任の大谷校長の言葉を借りれば、高等学校は将来の進路に対して三田志向がかなり強いという事実があります。慶應義塾はそれ以外にも多様な選択肢をそろえています。もちろん慶應義塾大学に全員行く必要もないわけで、それ以外の進路も含めれば多様な選択がみんなの前に開かれていると思います。そういう前提で、君たちに刺激を与え、将来の進路選択を自分にフィットするように組み立ててほしいというのが、この将来展望講座の一つの目的です。

もう一つの目的は、やはり伝統あるこの高等学校は非常に多くの多様な人材を生み出してきました。素晴らしい先輩方がいます。そういう先輩方とじかに話すことによって、この慶應義塾高等学校の生徒として、日吉の丘の上で暮らしていることが、どういう意味を持っているのか、みんなにもう一回自覚してほしいという狙いもあります。

そういう先輩方がこの日吉の丘で、みんなと同じように泣いたり笑ったり汗をかいたりして過ごしてきた三年間、あるいはここをスタート地点として踏み出したご自身のキャリアのプロセスはどういうも

のだったか、みんなに知ってほしい。

と同時に、ライブなので、君たちが、諸先輩から当時の思いだけでなく、自分たちにとって指針になるようなメッセージをいただく、あるいはそれを引き出す場でもあります。ですから、この場を生かすも殺すも、君たちが先輩から、どういう証言、メッセージを引き出すかにかかっていると言ってよいでしょう。のちほど、そのような相互応答の機会がたくさんあるでしょうから、ぜひ先輩の胸を借りるつもりで、遠慮なく立ち向かってほしいと思います。それが本高等学校における先輩後輩の関係だと、私は思っています。

さて、今日お越しいただいたのは英正道さんです。英さんのご経歴を簡単に私から説明したいと思います。一九三三年のお生まれで、この慶應義塾高等学校の第三期生でいらっしゃいます。みんなにとっては大先輩になるわけです。その後、経済学部に進学され、一九五八年に外務省に入省されています。外務省にお勤めの際、英国のオックスフォード大学に留学され、経済協力局長、在ニューヨーク総領事、外務報道官、そして駐イタリア大使を歴任されています。

大使とは非常に高い位で、私は先ほどから英さんと申し上げていますが、国際儀礼に従えば、本来、英〝閣下〟と呼ぶべき立場の方です。国の主権を一身に代表する立場を経験された方です。この高位に就くのは非常に大変なことで、官僚の世界は、最近は多少事情も変わってきてはいますが、ご存じのように、官僚を養成するためにつくった大学、すなわち東京大学がこの分野に多くの人材を輩出してきました。そのような中、英さんは、義塾の出身者で初めて大使になられた。こういうご経験をお持ちの方です。外務省を退官後は、鹿島建設の常任顧問、日本英語交流連盟名誉会長、そして日伊協会名誉会長を歴任されています。

近頃、日本外交は非常に難しい時代の課題を背負うようになってきました。しかし、難しいということは、逆に言えば楽しい、面白いと思える時代になったということでもあります。そういうことも含めてお話を伺えればと思っています。それでは英さん、よろしくお願いします。

私の塾高時代

英　駒村校長、ご紹介ありがとうございました。今ご丁重なご紹介をいただいた英です。今日はお招きを受け、皆さんとお会いするのを非常に楽しみにしていました。高校の卒業生は恐らく四～五万いるだろうと思うのですが、その中から選ばれて話をしろというのは大変な名誉です。皆さんの期待を裏切らないような話をしようということで、実は緊張しているのは君たちではなく、私のほうです。

私は、ご紹介があった点は省きますが、一九四九年四月から一九五二年三月まで、皆さんのご両親すらまだ生まれていないころだと思いますが、この日吉で約三年を過ごしました。約三年というのは、ここが米軍に接収されていて返ってこなかったので、三田などあちこちを歩き回り、やっとここに来ました。それで二年半ほど日吉で過ごしました。

そういうことで、孫子の兵法ではないけれども、「敵を知り己を知らば百戦危うからず」で、まず今の高校の皆さんはどんな人たちか、私はイメージがわかないので、この間、日吉祭に行きました。驚いたのは、第六十三回日吉祭と書いてありました。私は第三回の日吉祭をやりました。ですから、その間にまさに六十年の日がたっている。本当に隔世の感を感じました。

非常に感心したのは、我々のころとは比べものにならないぐらい、施設がよくなっています。プラネタリウムまであるのは驚いたし、皆さんは見ないだろうけれども、廊下に動物標本があったり、鉱物標本があったり。あんなもの、昔は全くありませんでした。ただ寒々とした校舎があっただけですから、みんな恵まれているなと。南側のグラウンドも人工芝じゃないですか。我々のころは泥で、風が吹けば砂が舞い上がるようなところだった。施設は本当によくなっています。

そういう意味で皆さんは素晴らしい高校にいらっしゃって、ごまをするわけではありませんが、素晴らしい校長がいらっしゃる。この間、一晩お話を伺う機会がありましたが、大変情熱をお持ちです。校長は偉過ぎて雲の上の人のように思うでしょうが、友達のようなつもりで遊びに行って話をしたら、きっと彼はとても喜ぶと思います。そういう人です。

この立派な名前の将来展望講座は前の校長が始められ、それを二回目で続けられている。私がよく言うのは、アイデアを出す人は偉いけれども、もっと

偉いのがそのアイデアを実現した人、しかしさらに偉いのはそのアイデアを続けた人です。

誰かが知恵を出し、アイデアを出すと皆が素晴らしいと感心する。しかし、それは実現しなければ意味がありません。実現する人はもっと偉い。しかし、往々にして人は、前任者のやったことは大したことないとやめてしまい、自分がまた別のことをやる。日本ではタコ壺のような組織が次から次に出来て、育たないのです。

やはり、いいことは続けなければいけない。そういう意味で、校長が前の校長の始められたことを続けて、二回目にお前が来いということなので、私はたいへんうれしく思って来たわけです。そのために下調べもしてきました。

皆さん、今日初めてお会いした方が九十九パーセントだと思います。この前の日吉祭のときに二つ三つの部屋をのぞいて、お茶をやっている人や、カンボジアの研究をしている人と話をしました。今日ここに来ていらっしゃる方がおられれば二度目かもしれないけれども、三度目に会うかどうかは分からない。

人生は一期一会と言います。この一回が最後という覚悟で臨めと。これはお茶の教えですが、私も今日の機会は一期一会と心得て、皆さんに二度、三度と会うことは恐らくないのではないか。一生で一回だけお会いして、そこであなた方に何を伝えるかということで、非常に緊張したわけです。

それで私なりにかなり考えて、こういうことにさせてもらおうと思っています。私は来年八十になりますから、そういう年寄りとして六十年前のことを、慶應高校の時代はどういう意義があるのか、自分なりに振り返ることで、あなた方に、偉そうな上から目線と思われることを覚悟の上で、はじめにメッセージのようなものを二つ三つお話しします。

それから、私は外交官をやって四十年過ごし、その他いろいろなことを経験しましたから、はっきり言って空の下にあることであれば何でも質問してこい、何でも答える自信はあります。その中で皆さんが判断して、こいつに聞いたら普段疑問に思っていることで、本にも書いていない、テレビでも言っていないようなことが少しは聞けるかな。

この年になると、怖いものは何もありません。だから私は本音ベースで話します。大胆率直、正直に何でも話しますから、私のメッセージの後、四～五人の方から質問してもらって、その中から皆さんの共通の興味があると思うことに絞ってお話をする。

そういう珍しい取り組みをしたい。

なぜかというと、一方的に私が話しているだけでは、だいたい自慢話になるか、お説教になるかに決まっています。しかし、後半部分は君たちと一緒につくりたい。そういう気持ちで質問してください。質問がなければ、私はその時点で失礼して帰ります。質問ができないような人たちに話をする気はないと、はっきり申し上げておくので、二〜三人の方は質問を用意して、「質問」と言ったらすぐ手を挙げて質問してくれないと困ります。

ただ、その質問の中から選ばせてもらうのは私で、ちょっとヤバいとか、機微なものを避けるわけではありませんけれども、私が答えられないこともあります。世の中には誰に聞いても分からないことがたくさんあります。日本人は「誰かが知っているだろう」ということが明治以来ずっと染み込んでいて、青い鳥を探しに行けば、どこかにあるだろうと。

いまだに国会は調査団と称し、年間何百人という議員を外国に送っています。殆どが物見遊山です。その基礎には、世界のどこかには日本よりいい組織、いい制度があるという前提ですが、そんな時代はもう終わりました。

人に聞いたら教えてくれる。今後どういうことをやったらいいか、誰かに聞く。新聞を見れば、そんな記事ばかりです。毎回多くの人に聞いて、名前のある人に聞いて、「そうか、そういうものか」と思うのですが、自分で考えて、自分で判断して、自分で意見を述べなければだめな時代になっています。

だから、まず皆さんから質問してもらい、それに答えるということで第二部をやる。その後十分か十五分残しておいて、そこでまた普通のQ＆Aをするので、そういう構成にぜひご協力していただきたいと思います。

六十年前にこの高校で暮らしたときは、本当にいろいろな人がいました。特定の人の名前を挙げるのは若干問題がありますが、皆さんがよく知っている名前を挙げれば、富士ゼロックスの小林陽太郎君や、劇団四季の浅利慶太君は同級生です。そういう人が同じクラスにいるか、同じクラブにいた。

これは今でも同じ。君たちの中に将来の小林陽太郎、浅利慶太が必ずいます。また自分がそうならなければいけない。自分の後に道ができる。自分が何かを始めて、何かを完成する、何かをやるという人が君たちの中にいる筈です。

私が外交官になるときに非常に感銘を受けたのは、一九五七年ごろ、インドのネルー首相の一言で

す。来日したネルーさんが三田の山上に来て、講演をしました。英語ですから、当時の私には半分も分からないのですが、彼は非常に熱を込めて「君たちの中に世界を舞台に活動する人が必ずいる、私はそれを確信している」と言いました。私はそのとき電気を受けたようにビッと感じました。

ただ私がこれから皆さんに言いたいのは、有名になれ、偉い人になれと言うような単純なことではありません。自分のやりたいと思うことを見つけて全力でやれた人が私は偉いと思っているので、誤解しないでほしい。

この間、日吉祭で英語の劇などを見たのですが、皆さん本当によくやっているなというのが率直な印象です。おだてる気はないけれども、「このごろの学生はだめだ」と言う人もいますが実は、そうではなく、これは相当なもので、これは大丈夫だと。

駒村校長とお話しすると、みんな就職に有利な経済学部や法学部へ行きたがると言うのですが、それは間違っています。人生至るところに道がありますから、それをこの講座はある意味で壊す。

例えば異論があるかも知れませんが、私は塾の中でいま学生が一番勉強しているキャンパスは湘南藤沢キャンパスだと思います。私は同級生の親友の小島昌義君と一緒にお金集めをして、藤沢の学生に未来の日本を見据えたフィールドワークに基づく政策研究を支援する活動をしています。なぜかというと、藤沢は学生が勉強しているから。あのキャンパスは二十四時間寝ないと云われます。寝袋を持ち込んだ学生たちが目を輝かせて何かやっているのが面白い。それだけの熱気は、残念ながら三田のキャンパスに行ってもありません。だから、どういう学部に進学するかは皆さんの大きな関心事でしょうが、既成概念にとらわれず、よく見て決めたほうがいいと思います。

現時点から振り返ってみて、やはり私にとって最も実りが多かった時期は、慶應高校の三年と、大学は飛ばして、留学したオックスフォード大学での二年です。この二つの時期があらゆる意味において私をつくったと思います。

何がよかったかというと、自由と時間がありました。今はだいぶ学校当局が生徒を取り締まるようになってきているから、昔のような自由度はないかもしれませんが、少なくともこの高等学校には他にない素晴しい環境があります。皆さんの知識や知能水準も、全部が全部とは申し上げませんが、かなり高い。判断力もお持ちです。それが自由に考え、行動

できるのは高等学校のときです。大学へ行くと、すぐに次は就職のことです。

特に慶應高校は一貫校ですから、大体皆どこかの学部に進めます。こんなことを言うと校長に怒られますが、そこはすごく有り難く、素晴らしいことです。ただ他にやることがあるなら、大学に行く必要もありません。先ほどの浅利慶太は文学部へ行きましたが、すぐやめて劇団四季を結成して、今は全国に一ダースもの自前の劇場を持つ世界に類例を見ない隆々たる劇団をやっています。

そういう意味ではどこの学部へ行くか、あまり心配してもしようがないのですが、現実には学部の選択で人生のかなりの方向性が定まるし、またそれによって、だいたい先が見えてくる。

君たちにはそれがまだ全然見えない。君たちは原石です。恐らく素晴らしいものを持っている人はたくさんいると思います。ここから君たちの顔を見渡せば分かります。目がどんよりしている人や、まともに私の顔を見返せない人は大した原石ではないと思うのですが、私の目を憎らしそうに「こいつ何を言うんだ」という顔をして見ている人は、相当見込みがあります。

さて私は三年間、ここで友人と切磋琢磨した。文学の面、語学の面、演劇の面など、ありとあらゆる面で私より優れている人がたくさんいました。結局、消去法のような形で残っているところということで、外交官の道が出てきた。

もう一つは、当時の日本の状況が、戦争に負けた日本が何とか立ち上がって行かねばならないという時代でした。それに貢献するには、私の適性等を考えて、いちばんいいのは外交官だろうと思い始めたのが高校三年ぐらいです。

素晴らしい友人と素晴らしい時間を持てた。しかもクラスよりも、クラブ活動です。私は体育会系ではないから、文連で活動していました。郵便切手研究会とかライブラリークラブです。六十年ぶりで日吉祭に来たら二つとも、気息奄々と今も続いているようですが、いずれも仲間と創設しました。体育会系の人はグラウンドで汗をかき、素晴らしい友人ができていると思います。大学ではそういうことは殆どありませんでした。高校からの進学者にとっては、一生の友人が出来るという面では大学は付け足しのようになると思っていたほうがいいかもしれません。

私の場合は外交官試験を受けるということがあったので、大学は相当にサボってしまいました。外交

官試験に通ってから、外国語を習得するために、新規採用者全員を外国の大学に二〜三年、役所で留学させてくれるので、オックスフォード大学に行きました。

オックスフォード
――可能性を試せる場――

英国でもこの大学はケンブリッジと並んで非常に特殊な大学です。当時オックスフォードには男のカレッジが二十五と女のカレッジが五つあり、学生はまずそのいずれかのカレッジに属します。カレッジは全寮制で、少なくとも一年は起居をともにします。あらゆる学部の学生が雑居しますから、自ずと広い付き合いが出来ます。実際の勉強はカレッジでチューターが付きっきりでやります。チュートリアルシステムは非常に特殊な制度ですから、日本にはないのですが、要するに自分で勉強する。チューターはその勉強を助けてくれる人です。一年勉強してから大学の入学試験があり、要求されるレベルに達していない学生は容赦なく追い出されます。セント・ダウンというのですが、私が親しくしていた友人四人のうちの三人までが一年後別の大学に行かねばならなかったのには驚きました。大学はカレッジに入学した学生を一年後に試験をして入学を認め、レベルの低い学生はふるいに掛け、最後にまた試験をやって学位を出す。基本的にこの三つしかしません。

大学にはもちろん講座があります。講座を聞きに行くとすごく偉そうな先生がいて、「十六世紀のインドの階級社会」について特殊で高度の講義をやっています。刺激としては強烈ですが、教授の言うことを一生懸命に聞いても、それが一年後の入学試験にも、卒業試験にも直接には役に立ちません。

私としては全く別の文化環境の下で、言葉もすべて英語で、ものの考え方が異なる友人との濃密な生活で貴重な経験の連続でした。生徒は皆私より年下の人でしたが、日本の学生よりずっと大人っぽかった。ただ勉強だけの人は尊敬されず、カレッジ内外で多様なクラブ活動をやり、その活動を通じて有力な卒業生とも接触をしています。そこで感じたのは、オックスフォード大学の生活そのものが、イギリスの若い人にとって、自分の才能をとことんまで伸ばす可能性を試せる場なのだということです。

オックスフォードで学生がいちばん尊敬しうらやましいと思う人が三～四人います。一人はオックスフォード・ユニオンのプレジデントです。古色蒼然たる建物があり、そこで英国の議会と同じようなやり方でディベートをしています。そこから世界中の政治家が育っていっているし、オックスフォード・ユニオンのプレジデントをやった人には、卒業と同

時にすぐイギリスの保守党や自由党から政治家になれと声がかかるぐらいです。ユニオンのプレジデントは、毎学期、英国議会さながらのディベートに秀でた人物の間の激越な競争で皆が選ぶ最高のポストで、新入生等には口もきけないようなすごい存在です。

それから、ボートのユニヴァーシティー・ブルー（正規の選手）です。それぞれのカレッジにボート部があり、カレッジのブルーがいるのですが、大学全体の選手は段違いの存在で威張っています。学生は安い南アのシェリー酒などを出してしょっちゅう自分の部屋でパーティーをしています。女の子を連れてきてガヤガヤやっているのですが、そこへボートのユニヴァーシティーのブルーが来ると、女性はみんな彼に殺到してしまいます。

それから、演劇でオックスフォード・ユニヴァーシティー・ドラマティック・ソサエティー（OUDS）プレジデントも本当にすごい。私のカレッジにそのプレジデントがいました。ケン・ローチ。映画好きの人は彼の名前を聞いたことがあるかもしれませんが、今世界で有名な社会派の映画監督になっています。

オックスフォードではカレッジのレベルだけの付き合いから突き抜けて、大学レベルの付き合いができるようになると成功者です。ここで成功すればイギリス社会において成功するという、一つの自信のようなものが生まれてくる。

そういう意味では、私にとっては慶應高校とオックスフォードの生活は非常に似ている面を感じました。慶應高校で切磋琢磨した中で自分の進路が定まった。またオックスフォードで二年間過ごしたことによって、外交官として英語を使って世界で仕事する上で、本当に貴重なことをたくさん学びました。

日本の場合、大学での講義があったら、真面目な生徒は前のほうに並び、先生の言うことを一生懸命ノートを取ります。私の時代はプリントを買ってくるとか、女子学生は熱心にメモを取りますから、それを貸してもらって写す。試験問題は、先生の話したことの中にヤマがあって、だいたい当たります。それで先生の言ったことを上手く再生産すればきちんとAを下さるわけです。

私は経済学部でしたから、必須科目に経済原論がありました。私のときの経済原論の教授は遊部久蔵教授という、マルクス経済学の世界的泰斗です。当時マルクス経済は時代遅れで、一生懸命マルクス経済をやっていたのは日本の経済学界ぐらいです。で

すから、日本の泰斗は世界的な泰斗です。

遊部久蔵教授のマルクス資本論の講義を一年勉強して、試験問題は「資本主義の将来を論ず」と。お茶の子さいさいで教わった通り資本主義は必ず崩壊すると論じれば、三重丸ぐらいの成績は取れるわけです。これは一つの具体的な例ですが、日本の大学はだいたいみんなそうです。先生の言ったことを覚えて、そのままリプロデュースする。その能力に長けたものが評価される。これが大学です。

しかし、それは世界では全然通用しない。外国の大学に留学しなさいと、私が皆さんに強く言っているのは、世界ではそれが通じないことを知ってもらいたいからです。私は先生が言ったことを一生懸命に覚えて、試験でそれをリプロデュースする能力に優れているかどうかで、人生の進路が決まるのは間違っていると思います。

私は役人が大嫌いです。自分も役人を四十年やったくせに、何を言うのかと言われますが、なぜ嫌いか。役人は本来国に尽くすのが本分ですが、今はチャンスがあれば権限を増やし省益の拡大をはかり、それが私益にも繋がるようになってしまいました。官を尊び民を卑しめる国民性にも大きな責任がありますが。明治の初めに新政府ができて、非常に優秀だが、地方の田舎に育って学問をする機会がない人に、国家が低廉な高い教育を与える。これが東京大学のスタートです。その代わり、ここで学んだ者は国のために働けということで、役人になったり、裁判官になったり、公職に就く。そういう大学でした。

学生の両親もそんなにお金持ちではなかった。今、東京大学の学生の両親の年収は、恥ずかしながら慶應義塾大学の学生の両親の年収よりもずっと高いと思います。ほとんどの親は政財界のかなりの成功者の子息です。そういう大学になっているわけで、もう歴史的な使命を終えています。

先ほど批判した記憶力偏重のシステムで勝ち残った勝利者と自他ともに許すものが東大に蝟集（いしゅう）し、財務省などは東大法学部の成績優秀者を集めます。要するに自分は日本で一番の学府に来た。他の大学よりも優れている。だから、俺たちが日本をコントロールする。そういう考え方の人が多く主要官庁の役人になっています。

我が慶應義塾大学にはそういうことは全くありません。福澤先生はまさに役人になるなと言われたわけです。福澤先生はごく一時期明治政府の要職につきましたが、政変があって排除され、それ以来官と

は無縁の一生を過ごされました。福澤先生は今だったらまた別のことをおっしゃるかも知れませんが、慶應義塾大学は優れた人物を生み出す大学であっても、権力者を作ろうという大学であってほしくありません。

外交官試験――二度の失敗――

駒村校長は大使は高官だとおっしゃるが、大使なんて大したことはありません。世界中に日本の大使は百五十人ぐらいいるわけです。ただ私が慶應から外務省を目指した時には、慶應から外務省には絶対に入れないと。一人も入った人がいませんでしたから、そのように思われていました。

私は慶應幼稚舎から大学院まで十六年間ところてんでずっと上がってきたから、受験勉強というものを全くやっていません。それでも、大学四年のときに受けて、なんとか一次試験は受かりましたが、口頭試問と面接の二次試験で落ちた。こういう場合、東大や他の大学ではみんな留年します。慶應では留年制度がなく、落第となります。しようがないからと言うと怒られますが、法学部大学院に移り、一年目に再度試験を受けました。

前年に一次試験に通ったのでかなり自信があったのですが、試験の一週間ほど前に親しい友達たちが陣中見舞いだと言って、当時非常に貴重だった牛肉を持ってきて、すき焼きを腹一杯食べました。その前ずっと消化に良いものを食べていたのが、いきなり肉を食べたので、胃袋が驚いてしまい、試験の二～三日前からじんましんが出てしまった。注射をしてもらうと止まるのですが、それが切れるとまた出て来るひどいじんましんです。

しようがないから注射を打ってもらって、なんとか二日間は試験を受けました。すると三日目の朝、体に震えが来て、抑えても止まらない。自分でコントロールできない。ガタガタ震えた。母が心配して「今日はもうだめだ、行っちゃいけない」と言うのですが、私はこのために一年間勉強したのだから、死んでも行くと言い張った。母がついてきてくれて、試験場の本郷の東大の近くの安い宿屋を一部屋取り、試験を終えると、部屋に帰ってきて頭を冷やし、また出かけていく。そんな状況では結局、一次試験は通ったものの、また二次試験で落ちてしまった。二次試験で、試験官が「今年落ちたらどうする？」と聞くのです。私は落ちるんだなと思ったら、見事に落ちた。二浪です。

大学院の二年になり、二度も落ちるとは考えていなかったから、初めて今年落ちたら本当にどうするのだろうと思った。それで遅まきながら就職部の張り紙を見たら、大学院を出た者を採る企業がないのです。日本鋼管とあと一社ぐらいしかない。私はい

くら何でも鉄屋に向いていませんから、非常に困りました。東京銀行に父の知っている人がいるので、相談したら、学部卒ということで良いなら試験を受けさせてあげると言うのです。

これは大変だと、大学院二年のときの外交官試験は、最後の土壇場になって必死に勉強しました。背水の陣という奴です。たまたまその年の試験会場が三田の慶應の教室でした。ホームグラウンドだったから、これは験がいいと思った。

試験勉強をするために試験官の書いた本を読み、その試験官の書いたとおり書くと、成績はいいそうです。ところが重要な科目の試験官の多くが東大の先生でした。東大には本のない教授がいました。そういう人はどうするのか。東大の生協に行くと、先生の講義録を売っています。天ぷら学生で何度もその先生の講義を聞きに行きました。顔を見て、どんな傾向の先生かを知る。講義録も勿論買いました。

いちばん困ったのは英語です。慶應はいい教育機関ですが、今は少しは違うだろうと思いますが、語学にかけては全然だめなのです。英語もみんな嫌いでやらないから、どうしても後れていきます。気がついたら英文法は半分ぐらいしか教わっていない。だから大学院の二年生で英文法を勉強しました。

それから、単語の知識が圧倒的に不足している。それで私は、今そういうものがあるかどうかは知りませんが、「赤尾の豆単」という単語集が出ていたので、それを買って恥ずかしながら一ページ目から赤線を引っ張って覚えるという、屈辱的な勉強をしました。

最も苦手なのは英作文です。英語は大事ですが、いちばん大事なのは英語を書くことです。しかし、日本では書くことなど全く教えません。それでしようがないから、吉田総理のスピーチの英訳をされた伝説的な小畑薫良さんといわれる素晴らしい方を紹介していただき、英作文のご指導を得ました。

試験問題は自由作文ですから、「日本の進路」、「アジアの中の日本」、「国連外交」、「日本の文化について」など十項目ぐらいの小論文を英語で作文して小畑さんに直していただき、それを全部覚えました。どんなテーマが出ても、適当につなぎ合わせて書けば、名文ができるのです。

私の外交官試験の英作文はそういうもので、おかげさまでめでたく初めて慶應から通ったのが一九五七年の秋です。確か十五人のうち十人が東大で、あとは一橋大、京大、外語大などでした。爾来四十年間私はほとんど東京大学法学部出身の人たち

と、役人生活をしました。

ここに東大の卒業生の方がおられても、東大の先生がおられても、私は面と向かってはっきり申し上げられますが、東大の学生に驚くことは全くない。むしろ大事なのは志だというのが、私の強い印象です。先ほど言ったように、権力構造のトップに入ることが自己目的化している人たちには多くを期待できません。

はばかりながら、私は外交官になろうと思って試験を三年間必死に受けて、初めて慶應から入った。私が入ったので、コロンブスの卵で「あいつが通るなら俺も通るかな」と、私の後に非常にたくさんの人が外交官試験を受験して合格して外務省に入りました。恐らくその数は六十～七十名だと思います。世界に百二十～百三十の大使館がありますが、現在駐米大使を含めそのうちの半ダース位の大使は慶應出身者です。

慶應の人は先輩を頼るとか、楽をしようとする気があって、自分で自分の道を切り開いていこうという強い意思が欠けています。それから、もうだめだと思ってあきらめてしまうのですが、私は本当にやる気だったら何でもできると思います。

外交官試験を受けたい人がどうしたらいいかと、私のところに相談に来ます。「本当に君はなりたいのか。だったら君はなれる」。「そうですか？」と不満そうな顔をされます。しかし、これは何も外交官だけではなく、本当にやる気でやれば何でもです。

ただ、本当にやるというのは大変なことです。すべてを投げ打って、それをやるために自分の全エネルギーと全知力と全能力を懸けるわけですから。ただそれだけの覚悟がある人は何でもできると思ったほうがいい。

良く例に挙がりますが、シュリーマンは、トロイの遺跡を発掘するためにお金もうけから始めて、晩年にトロイの遺跡を発掘しました。君たちも、例えば海洋考古学をやり朝鮮半島の沖に沈んでいる古い船を発見したい。それには相当お金が要るから、俺は金持ちになってからそれをやる。そんな人生の夢を抱いたら、必ず実現できます。

もちろん私はいろいろラッキーだったし、先ほど申し上げたように外交官試験の幸運も相当あります。ただ、東京大学の名誉のために言うと、私が二度目の試験に落ちたとき、たまたま長野の温泉に入っていたら、その年に同じく一次試験を通って二次試験も合格した長谷川和年さんとお風呂場でばったり会った。この方はのちに中曽根総理大臣の秘書

官を務め名秘書官といわれた方です。長谷川さんは、「俺のところへ来い、合格の秘訣を教えてやる」と。そこでお宅に伺って外交官試験の合格法を聞いたら、私が今までやっていた勉強方法は必ず落ちる勉強法だと言われて、愕然としました。

例えば試験科目に外交史があります。私の父が東洋外交史の先生だから、家の本棚にたくさん外交史の本があった。外交史は面白い。私はたくさん読みました。そうしたら長谷川さんいわく、それは確実に落ちる道を選んでいる。どうするのか。岡義武先生の本で百五十ページぐらいの外交史があるので、それを三度、四度読んで全部覚える。

そういう受験テクニックを全然知らないから、そういうことも全部教えてくれただけでなく、彼は自分の受験ノートを全部私に下さった。東大の人といっても嫌な人ばかりではない。それ以来、親友です。私は彼と星野温泉のお風呂で会わなかったら、外交官試験に通っていなかったかもしれない。人生には運も縁もあります。よく言ったもので、自分でやれることは半分ぐらいで、あとは空の上で誰かが見ていて、あんなに一生懸命やるなら手を差し伸べるかという話だと思っています。

三つのメッセージ

私の諸君への第一のメッセージは、最初に申し上げたように、とにかく高校の三年間は大事な時期です。切実に大事です。一瞬一瞬がもったいない。

私はなぜこんなに汗をかきながら皆さんに熱弁を振るっているかというと、君たちの貴重な時間をもらったので、それに対してきちんとお返ししたいと思っているからです。いいかげんなおざなりなことを言って済ませたくない。とにかく一つでも今日はよかったと思って帰ってもらいたいから、必死になっています。

と言う訳で慶應高校の三年間は本当に素晴らしい時期だから、二年生、三年生の人は、もしこれまで無駄に時を過ごしていたら、これからは心を入れ替えて一分一分を大切に過ごしてほしい。

第二のメッセージは、今はやりではありませんが、国のためとか「公」のためということは大事だということです。私個人としては一生を国と「公」のために働いてきたという誇りがあります。私は一外交官として振り返って、本当にやりたいことをやれたし、やらせてもらえた。金もうけや個人的なステータスを求めることはしませんでした。それで私は悔いがないし、心のどこかに、自分のことだけ考えていては人生済まない、そんな人生は最低の人生だと。皆が皆役人になって国のために働く必要は毛頭ありません。しかし「私」の他に「公」というものが重要だと私が言ったことだけは記憶に留めておいて下さい。

アメリカにはあれだけ格差がある。大金持ちがものすごい巨額のお金を動かして、一瞬で大金をつかむ。最下層の人たちはどん底の暮らしをしている。しかし、なぜみんなが革命を起こして大騒ぎをしないのかというと、機会が与えられているわけです。だんだん機会が狭まってきてはいますが。

人生は一回しかない。いくら頑張っても百ぐらいで死ぬのです。神様はこの点ではすこぶる公平で、万金を積んでも寿命を延ばすことはできない。その与えられた一回の命を、あなた方はご両親からもらった。恨んでいる人もいるかもしれませんが、もらったのは現実だから、それは受け入れなければいけない。そのもらった人生をどのように生きるかを考える。これが大事な分かれ道です。

あとは自分が自分に与えられたものを使って、どこまで地球の上に引っかき傷をつくれるか。自分が

いたためにどれだけの違いができたか。こういう風に考えると人生とは限られた時間に自分が精一杯演じるドラマであると言えるのではないでしょうか。

私は君たちがうらやましくてしようがない。私の余生なんてもう高が知れていますから、いくらあがいてもしようがない。もう一度高校に戻らせてくれといっても戻れない。一回きりの人生でした。その一回きりの人生をフルに生きることのありがたさ、素晴らしさは、私の年にならないと分からない。

だから、後悔先に立たずですが、人生を一回限りのドラマと考えると、演じた帰結に執着するのは間違いと判るでしょう。アメリカはそれが社会制度としてできている。アメリカでは人生の成功者である億万長者が全財産をポンと寄付し、その使い方は他人に任せるわけです。ボードをつくり、そこに有名な人を入れて、このお金をどのように運営するか、あなた方が全部決めてくれと。自分はこの舞台で生かしてもらって成功した、その成果を社会に差し上げるという考え方です。それが「公」ということです。どんなにアメリカ人がプライベートでお金をもうけたからといっても、ヨットに乗ったり、素晴らしいヴィラをフロリダに持ったり、日本人とは比べものにならない富の集積がありますが、そういうことを自分が出来なくても子供や孫が出来る可能性があるということで富の格差への不満が爆発することがないのです。健全なアメリカというのは子孫に美田を残さず、自分はこれで一生が終わったから、自分のしたことは社会にあげる。それであの社会は成り立っています。

日本の社会はそこが中途半端で、資産を財団に寄付しても自分の息子がそこの専務理事で一生食べられるようになどとみみっちいことを考える。政治の世界でも世襲は世界で類例を見ない規模に達しています。こういうことでは若い人の夢が狭められます。一生は一回だから、その間にチャンスが与えられ、そこで得たものは社会に還元する。そういう仕組みになれば、日本でも皆がもう少し明るく楽しい人生を設計できると思います。それが中途半端だから、今は暗いのです。

しかし、不公平を社会や他の人に責任転嫁するのは間違っています。相当のチャンスが与えられているのだから、それを生かすか生かさないかはそれぞれの人が決めることです。そういう意味で、私は国に、公に奉仕する生活を送ってきましたが、それについて悔やんだことは一度もない。確かに、友人はいまだに運転手付きの車に乗ったりしている。私は

地下鉄とバスで移動していますが、そんなことを全然悔しいと思わない。

それから、勲章もお断りしています。人間にランクを付けるのは間違いだと、私は固く信じているから、何も犯罪歴があって勲章をもらえなかったのではなく、辞退したからです。塾祖福澤先生も勲章はもらっていません。

人生みんなそれぞれと慶應出身の小泉元総理が言いましたが、人それぞれいろいろだから、高いとか低いとかランクを付けるのは間違っている。その人が自分に与えられた素材、チャンスを生かして、どこまでやったかが評価されることになってほしいと思う。皆の努力の集積が国を作るのです。皆さんはまさにその入り口に立っているわけだから、私は敢えて見逃されがちな国や「公」の意識を持つことの大事さということを話したつもりです。

三つ目のメッセージは、前に毎日新聞の岸井さんが来て言われた、好奇心を持つことです。なぜ好奇心を持つことが大事だということを私なりに考えて話をしたいと思います。

なぜ好奇心を持つべきなのか。まず今ほどエキサイティングな世界を人類は経験したことがありません。素晴らしい好奇心の対象がある時代に生きているということでしょう。徳川の二百六十年、良く出来た循環社会だったと言われますが、あそこでお百姓さんに生まれたら、よほど運がよくなければお百姓さんで一生を終わるわけです。チューダー時代のイギリスに農民に生まれたら、農民でおしまいです。今は世界中で植民地もなくなり、階級もなくなり、身分差別も減って来て、自分の意思で自分の行く手が決められ、努力次第でどこまでも行けます。誰にでもチャンスが無限に広がっているわけです。こんなことは人類の歴史でかつてありません。

もう一つは、万事がこれほど大きく変化している世界は初めてです。確かに変化のスピードは速過ぎます。私が最初に外国へ行ったときは、南回りのプロペラ機でまずマニラに着いて、それからバンコクに着いて、カラチに着いて、アテネと、数時間飛んでは降りる。それがその翌々年からジェット機になり、それからまた翌年に北極経由になって、すごいなと思った。今は大圏コースを真っ直ぐ飛びます。

そういうことで好奇心を持たねば進歩の激しさについてゆけません。ソニーのウォークマンが世界を風靡したと思ったら、今やスマートフォーンで、私の同世代人はもう着いて行けない人ばかりです。音楽媒体もSPからLPへ、更にCDがあったり、D

VDがあったけれども、どんどん変わって、同じ音楽のレコードもいろんな媒体で三種類も四種類も持っていますが、どんどん使えなくなっている。今はインターネットでダウンロードしてパソコンや端末に音楽が入ってくる。

私の年になると、目が回るような話です。あなた方はそれを当たり前だと思っているかもしれませんが、考えてみればこんなエキサイティングな時代はありません。人類史上、最もエキサイティングな時代だと思います。その中で生を受けた。こんな幸運はありません。今でもチベットに生まれたらどうなっているのか。チベットからだって世界に飛躍できますが、ハードルは高い。しかし、そういう意味でのハードルは全世界で下がってきている。

そういう機会がオープンになった時代はいつまで続くか分からないと思います。あなた方が僕の年になったときにどんな話をするか、非常に興味があります。極端な人はそのときには世界は終わっていると言うし、私もそれを若干危惧していますが、このようなスピードで物事が進んでいったら、どこかで破綻が生じることは確実です。しかし、どういう形で、どう起きるかは知らない。それは君たちが勉強してほしい。

そういう意味で好奇心を持っていると、すごく面白い。好奇心は社会や事象に持つだけではなく、人にも持ってほしい。隣にいる人に好奇心を持ってほしい。今は人と付き合うのが嫌だと。傷ついたり、傷つけたりしたくない。しかし、高校時代なんてある意味では傷つけたり、傷つけられたりするための時期です。けんかをして仲直りして親友が出来る。とにかくもっと近くで人を観察することです。

人を観察すると、どういうことが分かるか。一見取っ付きの悪い奴でも結構いいところを持っている、意外といいなと判る。善し悪しは相対的なものですから、逆に自分に自信がない人は、俺にもけっこういいところがあると判る。人に好奇心を持つことで、人間というもの一般についての理解がすごく深まります。

高校時代は嫌なことを言ってけんかになっても、どうということはありません。しかし、だんだん社会に出ると、変なことを言うと一度で人間関係がおしまいになったり、場合によってはピストルで撃たれたりしますから、それは気をつけなければいけませんが、高校時代には何を言っても許されるから、お互いに好きなことを言い、好きなことを論じて、そういう時間を持つことができる。だから、好奇心

を持つのは社会や物事だけではなく、ＩＴ機器だけではなく、人間にも向けてほしい。

最後にもう一つ、好奇心を持っていると、年を取りません。私はこうやって見ると、年を言わなければだいたい七十ぐらい、うまくいくと「六十五ぐらいですか」とお世辞に言ってくれる人もいます。私は七十九歳ですが、なぜこんなに若く見えるのか。若く見えるのが悔しくて最近ひげを生やしたのですが、私は私の若さの素は飽くことのない好奇心だと思っています。

本、書籍は無限の可能性を持っています。時間があったら是非本を読む習慣を高校時代に身に付けて下さい。ドナルド・キーン先生、私はよく知っていて食事をしたりしますが、彼がこの間テレビで、日本人は古典を読んでほしいと言っていました。そのとおりです。日本の古典を読んでほしい。それから、中国の漢詩です。いま私は『漢詩鑑賞事典』という本を拾い読んでいるのですが、昔君たちの年頃で習った詩が結構あって、改めて中国の詩の世界は素晴らしいと思ったりしています。またこのごろはiPadにダウンロードすれば、英語の本はただ同然で読めますから、部屋に本を置かなくても読める。

あらゆる意味で、あなた方は本当に素晴らしい時代に生きています。その中で好奇心を持ってチャンスをどんどんつかんでいく。それが君たちをどんどん大きくしていきます。それで好奇心を持ちなさいと。

第一回の講師として岸井さんは恐らく、社会との関わりを持つことが大事で、好奇心を持つことがその入り口だということを言われたのではないかと思います。しかし、私は更にそれを進めて、もう少し功利的に、好奇心を持つことは君たちのためになる。このように好奇心を意義づけたい。

以上の「高校時代は貴重だよ」「国とか公を忘れないように」「好奇心を持つことが大事」この三つが私から君たちへのメッセージです。

さてあとは質問。私が話さなかったことがたくさんありますから、私に聞きたいという人は手を挙げていただけますか。では先ほどから最前列で僕の目を食い入るように見てくれている、あなた。

進路選択の基準

生徒A（三年生） 今日はお話ありがとうございました。先ほどアメリカの例を出して、お金をもうけた人がそれを社会に還元するとお話しされましたが、お話を聞く限りだと、日本もそうあるべきだと受け止めました。そのためには日本の社会がどのようになるべきだと思いますか。

生徒B（三年生） 今日はお話ありがとうございました。僕は何年か前の外交官のドラマを見て、外交官に非常に興味があります。それで今日英さんがカットしたというか、外務省に入省して、そこからの外交官への道のりや、よかった点、悪かった点などを含めて、お話ししていただければと思います。

生徒C（三年生） 今日はお話ありがとうございました。日本の教育について、先生の言ったことをそのまま吸収してはき出すだけではもう通用しないというお話があったと思うのですが、その前にアイデアを出した人、実現した人、継続した人はもっと偉いという話がありました。

その中で、アイデアを継続させるという意味では、先生の言ったことをそのまま引き継ぐのも近いような気がするのですが、話を聞いている中で僕も違うような気がしたので、ここに関してもう少し具体的に差を教えていただけたらと思いました。

生徒D（三年生） 熱のこもったお話ありがとうございました。お話の中で、高校三年生のころに外交官を目指されたとおっしゃっていたのですが、そのころ全く前例のないことを始めようとした際、少なからず不安があったと思います。それに対してどのように付き合っていって、外務省に入られたのか。すごく興味があって、それをお聞きしたいです。

生徒E（三年生） 素晴らしいお話ありがとうございました。先輩のお話の中でも少し出てきたところですが、先輩の人生において官僚という仕事が中心になっていった。外交官を官僚と言うと、語弊があるかもしれませんが。今の情勢の中で、官僚という仕事は社会から見ると、いろいろな誤解があるかもしれませんが、何らかの問題があると言われています。先輩はご自身の経験から、そこはどのように思われているのか、非常に興味があります。ぜひ教

えてください。

生徒F（三年生） 今日は非常にいいお話をありがとうございました。今、自分は自分の将来についてかなり悩んでいて、その中で一つの進路を決めかねているのですが、どのような判断材料を基に自分の将来を決めればいいのかを知りたくて、質問させていただきます。

英 ありがとうございます。まだ手が挙がっていますが、取りあえず六つの質問をいただきました。まず皆さんの広い関心があると思った質問二つについて、少し長く話をしたいと思います。残りの質問も最後の十五分ぐらいのQ&Aのはじめに優先してお答えします。

最後の人の質問、進路判断はどういう材料に基づくべきか。まず、どういう材料に基づくべきでないかを言います。一つは人が言ったことを鵜呑みにしないこと。次は親が言ったことだからと思わないこと。自分の進路は自分で決めることが大事です。まず自分は何をしたいのか、明確にすべきだと思います。お金をもうけたいのか、何か素晴らしいことを発見したり発明したりしたいのか、あるいは奉仕活動など社会的に活動したいのか。

その内容はその人の性格によって異なると思います。だから性格に合わないことをやってはいけません。それが高校時代の大事なところで、いろいろな人と付き合ってみると、自分がどういう性格かが分かる。社交的なのか、協調的なのか、能力的にどのくらい頭がいいのか、そのようなことがかなり分かります。自分が相対化されてきますから、その中で自分に合ったものを選ぶべきです。

第一の基準は、自分が何をしたいかということです。何をしたいか決まらないというのはよく分かります。なかなか決まりません。また一度決めても、そのとおりに物事は進まない。

私が卒業した一九五六年はたいへん不況でした。前の年はみんな一流企業に入ったのですが、私の年はそうではなかった。しかし、振り返って見ると、その入った一流企業が、三十年、四十年の間に没落してだめになったケースが非常に多い。要するに先のことは分からないということです。先が分かって、先を読んで、先に合わせて自分の進路を決めるという態度は取らないほうがいい。先は分からないと思ったほうがいい。

先が分からないときに自分がどうするか。みんな

一度は死のうと思ったことがあると思います。私が高校時代にいちばん悩んだのは、人生は生きるに値するか、値しないかの問題でした。今はそんなことを悩む人は少ないらしいのですが、私が悩んだ挙げ句最後に出てきた私の答えは、今日お話ししたことです。与えられたチャンスを生かすために生まれてきているのだから、それをフルに生かそう。人生は生きるに値する。それ以上思い悩んでも仕方がない。

だから、あなたに対するお答えは、自分が社会とどういうことで関わりを持てるか。それによっていかなる差異をもたらせるか。君がそれをやったことによって、違いが出るか出ないかに自信を持てるか。そんな抽象的なことではだめかも知れませんが、理数系の頭脳を持っているか、それとも文系の芸術的な才能を持っているか。あるいは普通の人間なのか。私は両方とも持っていない普通の人間ですが、普通の人間でも外交官になると楽しいです。そういうことで、何が向いているかを発見し、それに適したものを選ぶ。私は今の段階ではそのぐらいしかお答えできない。

『君は自分の国をつくれるか』

そしてもう一つは最初の人の質問。私はこの質問を少し広く解釈して、日本がどういう社会であるべきかという質問としてお答えします。これはとても大事な問題です。あなた方はまだ選挙権がありませんが、今度の選挙と来年の参議院選挙は日本の将来を決めるような選挙だと思います。

「失われた二十年」を経験した日本はこれからどういう社会をつくったらいいのか。私はこれまで日本語では『君は自分の国をつくれるか』という本を一冊書いただけです。十年前、私が『中央公論』に日本国憲法の前文を改正しようという文章を書いたら、小学館から人が来て、これを若者向けの本にしてくれと。それで文庫本を書き下ろしました。今年たまたまスルガ銀行の岡野喜之助さんが復刻本をつくって下さいました。今日はこれを皆さんに名刺代わりのお土産に、お帰りのときに差し上げます。ここに私はあなたへの答えを書いたつもりです。だから詳しくはこれを見てほしい。

私は今の日本国憲法を改正すべきだという意見です。その理由は簡単に言うと、日本人は自分の国の憲法を占領者のマッカーサーからもらい、ありがたがって五十年、不磨の大典としている。こんなバカなことがあるか。自分の運命は自分の手で築くべきだ。自分の国の最高法規を自分たちで決めていない国が、世界中のどこにあるか。日本だけです。もらった憲法を拝んでいるのは。

私が疎開から東京に帰ったとき、東京は焼け野原でした。本当にがれきの山で何もない。日本がいったい生きていけるのかという時代がありました。私が外交官になったのは、日本が七年間アメリカに占領され、占領を終える前に新しい憲法をつくれと、屈辱的な憲法をつくらされた直後です。内容には悪くない点もあるのですが、これは外から与えられたものです。特にひどいのはその前文です。そこには日本の国というものが全くありません。だから、どこの国の憲法の前文としても通用する、無国籍の代物です。

私は役人の間は憲法の遵守義務があるから憲法批判を語りませんでしたが、退官してすぐに、九条などより前に、前文をまず改正しようという一文を中央公論に書きました。これがきっかけで小学館から若い人のために書き下ろしで文庫本を書いて欲しいという依頼があり、その本の中で私の理想とする日

本の姿を私の前文試案として書きました。差し上げるのは復刻版ですが、一切手直ししてない。十年前に書いたことが、いまだにどこも直さなくても通用するのです。十年間日本は全く進歩していないということです。停滞しているか、後退しているかもしれない。

あなた方は不況の時代に育ってきて、進歩や前進とは無縁の世界に生きているから、非常にかわいそうな世代だと思います。しかし悲観してはいけません。今は過渡期です。これから素晴らしい日本が築けるのです。そうと信じたい。それをみんなでつくらなければいけない。

つくるためにはどうするか。どういう組織にするかといった話は難しいから、ここでは言いませんが、この国は素晴らしい国です。どこかの国に生まれさせてやると言われても、私は日本に生まれます。それほど日本はいい国です。そのことをみんな自覚せず、よってたかって日本を悪い国にしている。全然違います。私は世界を広く見てきましたが、こんなに素晴らしい国はありません。ドナルド・キーン先生のような人が日本を好きだというのは特殊なケースでしょうが、彼は本当に日本のいいところを理解しています。

はっきり言うと、皆さんは日本に生まれて本当に幸せです。幸せ過ぎています。しかし、私が育ったころの日本はがれきの国でした。まさに日本全国が今の大震災の被災地のような状況です。現在の日本は素晴らしいインフラがそろっている。高速道路網、新幹線はじめ鉄道網ができている、大都市にはきらめくばかりの高層建築群がある。そして国民は一千四百兆円の金融資産を持っています。こんな裕福な国はありません。

このリッチな国はみんなの国です。君たちは素晴らしいスタートを与えられている。スタート地点があまりに立派過ぎて安楽だから、みんなイージーゴーイングになって、何もしなくても暮らせる。それで二十年間暮らしてきたわけです。他の国はかなりみんなへたっていますが、日本はへっちゃらです。

そういう日本の不思議さは少し勉強してもらったらいいと思いますが、この本は、四十年外国との関わりで暮らした人間として私なりに世界を見て、書いたものですから、これで最初の質問に対するお答えにしたいと思います。

挫折が人生を決める

あと簡単に、時間もないので、Q&Aにいきます。三番目の方が、先生の言うことをそのまま答案に書いて通用すべきではないが、アイデアを続けることは大事だというのは矛盾しないかと質問しました。少し私が舌足らずでした。鋭く聞いて下さってありがとう。最初の部分は学習について言ったのです。つまり批判的な心を持って物事を見なければいけない。先生が言ったからそれを覚えて、それをまた試験のときにリプロデュースすることで進路が決まる。その結果いい点が取れて、いい大学に行けて、試験にいい成績で受かれば、一生が保障される。私は、それはよくないと思っているから、自分でクリティカルにものを考えるべきだと言っているわけです。

アイデアの話との間には確かに矛盾があります。しかし、それは別のことで、自分のたこつぼが多過ぎで、小さな組織が無数にあります。小さな一国の主を目指し大同団結しないのです。今度の選挙で政党も十四もあります。私が大使を務めたイタリアもそうですが。

しかし、大同のために小異を捨てる。そのために誰かがいいアイデアを出し、誰かがそれを実現したのであれば、それはそれだけのエネルギーを持ってスタートしているのだから、続ける価値があるということです。アイデアを出した人のために、そのぐらいの敬意は与えてほしい。そのアイデアが間違っていれば、改善すればいい。その辺は若干矛盾したように聞こえたかもしれませんが、私の言ったことはそういうことです。

それから、あまり入らない慶應から外交官試験を受けるのは不安だったのではという質問がありました。それは不安でした。不安ではなかったと言ったらうそになります。しかし、なぜ外交官試験に通ったかといえば、外交官以外にやるべきことが思いつかなかったから、むしろこれになれなかったら自分はどうなってしまうのだろうという不安です。振り返れば、前に進むしかないという感覚だったから、不安が私をだめにするのではなく、逆にその不安があるために前に進むエネルギーに変えたということだと思います。

それから、官僚に問題があるという質問ですが、今の官僚には非常に問題があります。官僚のため

に言っておきますが、官僚がすべて悪いのではありません。官僚がいなかったら国は動きません。官僚が私利をむさぼるのがいけないと言っているわけです。ある時期まで、昭和三十年代ぐらいの役人は、私は他の省の役人も知っていますが、立派でした。私利私欲がなかった。

しかし、今の官僚は私利私欲がとても多い。その私利私欲は省益に結びついているから、自分の省の組織の権限を増やして予算を取り、その中で自分が偉くなろうと思っている。これは官僚制度の堕落です。だから、堕落した官僚にはなるなと。官僚制度は必要です。立派な人が私心を持たず役人になり、本当に国のために尽くすのが理想です。

そういう意味では、外交官時代のいろいろな道のりという話がありましたが、私の道のりは決して平坦だった訳ではありません。外務省で言えば事務次官がいちばん偉く、その次に外務審議官が二人います。私はニューヨークの総領事から外務審議官の一人として戻ってくることになっていたようです。しかし私を快く思わない政治家に阻まれ、そのポストに就くことができず、外務報道官のポストに就きました。

この程度の挫折はあります。でも私がこれだけ好きなことを言って、好きなことをやってくれれば、反発があるのは当たり前です。天に向かってつばを吐けば自分に戻ってきますから、これはしようがない。ただ、何が幸せかは本当に分からないということだけは、はっきり申し上げておきます。

そのときにその政治家が私を忌避せず、私が予定されていたとされたポストに就いていたら、たまたまその時期は国際政治の激動期でロシアのエリツィンがG7に入ってくる時ですから、ものすごく忙しくて、私は体があまり頑健ではないので、もしかすると倒れていたかもしれない。私はそのおかげで生きてきたし、そのおかげで駐イタリア大使になり、イタリアのすばらしさを知り、余生は魅力あるイタリアの理解促進の仕事をして、非常に充実した幸せな日々を過ごせました。

人生は何が幸せで何が不幸か、本当に分からない。挫折したときに人生は決まると言われています。私は相当生意気な外交官だったと思います。駆け出しの頃ロンドンで勤務しているときに先輩が見えて、食事をしたときにしみじみと、「君ね、人生では失敗したときが大事だよ」と言われました。私は「この人、変な人だな。初めて会ったのに、なんで失敗したときなんて嫌なことを言うのだろう」と思いま

した。

しかし、今ではそれはよく分かります。失敗したときにその人がどういう行動をするかで、その人が判断できる。やけ酒を飲むのも一つ、悔しいと思うのも一つ、別の道を選ぶのも一つ。失敗したときに人が見ている、天が見ている。私の人生も見かけほど順風満帆ではありません。そんなことは自慢してもしようがありませんが、幸せかどうかといえば、私は本当に幸せでした。

さてこれで頂いた六つの質問にお答えしたと思いますので、あと個別質問のQ&Aで更に質問があれば、それに一問一問答えます。さらに追加で。日本外交の問題点は何かという真面目な質問がなかったので、少しがっかりしたのですが、それはいいです（笑）。

やりたいと思えばできる

生徒G（三年生）　本日は貴重な講演ありがとうございました。先ほどやりたいことがあるときに、本当にやる気があれば何でもできる、途中で不安に負けそうになったが、逆にそれも力にできたとおっしゃっていたのですが、人間は夢に向かって走るとき、どうしても壁にぶち当たることがあると思います。そのときに挫折して他の道を探るのではなく、他の可能性を全部投げ捨て、夢に集中して走り込むのは覚悟がいることだったと思うのですが、その覚悟を折れずに持ち続けるための信念はどこから来るのですか。

英　私の経験を答えると、君たちが自分の身に置き換えて考える危険があるから、この質問へのお答えはすごく難しい。私は個人的な問題だと思うから、私のことを話すことに意味があるかどうかは分かりませんが、まず一つ、やりたいことの内容が問題で、そのときにどういう目標をセットするかが重要です。実現可能なものとするのが常識ですが、それにどのぐらい上乗せして上のほうを望むのか。

そういうことを考えると、自分は物理学者になって新しいエネルギーをつくるという目標をセットして、一生懸命やる。これは素晴らしいことだと思うのですが、適性、不適性があります。数学が全然だめな人間にはできないから、そういうところは客観的に見なければいけません。

ただ、外交官試験に通るとかいう程度の目標であれば、本気になってやればできると思います。慶應高校に入っているということは、それだけのインテリジェンスのレベルは確保されているわけですから、外交官試験について言えば、その人が必死になってやれば、できないことはありません。

私は外交官試験で苦労したという苦労話をするのは嫌なのですが、要するに三年も掛かったのはバカな勉強方法をしていたからです。もっと賢くやれば、もっと早く受かっていたと思います。勉強の仕方も間違っていたし、映画を見に行こうと言われれば映画を見に行くし、ガールフレンドとも遊びに行く。そんなことをやっていたら受かりません。その辺は思い切りよくスパッと切らなければいけなかったのでしょう。

同じことが目標を実現するにあたって言えると思います。二兎を追うのではなく、本当にこれがやり

たいなら、他のことをやめる。他のことをやめるということは案外難しくてできません。だから、何でもやりたいと思えばできるという裏には、その代わりそれに集中して他のことを切れるかということです。それは全然別のことです。やりたいと思っていても、実際やっていることは矛盾だらけで、ものすごく無駄なことをしていたり、目的にかなわないことをしている可能性があります。やはり効率よく集中してやることです。

私は皆さんに、不可能な目標を立てて死ぬ苦労をすることを勧めているわけではありません。しかし、死ぬ苦労をしても、後でよかったと思う人はいるだろう。それは最後に自分が死ぬとき、俺はよかったと思うか思わないかという話で、今から事前に、世界がどうなるかも分からないときに、個人の一生なんて分かりません。

国防軍ができて、徴兵制が復活するかどうか。それはないと思いますが、お隣の韓国に生まれていれば徴兵制で、戦乱の地に行けと言われて戦死してしまうかもしれません。それは自分でコントロールできない。今の日本にはそういうことがないので、そういう意味では恵まれている。

選ぶ目標は、自分が興味を持つことでなければいけません。好奇心と言ったのは、自分の人生を設計するときに、自分が興味を持てることにするのが大前提です。興味のないことで、自分に不向きなことを目標とするほど愚劣なことはありません。自分が何に興味を持てるか、何をやりたいか、何に向いているか。高校の三年間必死になってもがくと、その答えが出てくると思います。大学の時代ではなく、高校の時代です。そこでほぼ決まると思っています。

生徒H（三年生）　そんな大きい質問でなくてすみません。先生がずっとおっしゃっている適性は、先生だったら外交官に向いているとか向いていないとか、先生自身はどういうところで感じられましたか。

英　私は普通部から高校まで終始クラス委員です。当時の級長の重要な仕事は、先生とネゴシエーションをして授業をつぶすこと。今そういうことはやらないでしょう？　しかし、そのころはできました。先生も教えたくないから、うまいことを言って、理屈を言って、今日は自習にするとか。私は授業をつぶす才能があった。だから、交渉ごとに向いているかなと。だまして、ごまかす。ところで外交官の

定義は、「その国のために嘘をつくために外国に派遣された正直な男」です（笑）。ありがとうございました。（拍手）

司会　ありがとうございました。最後に駒村校長よりお言葉をいただきます。よろしくお願いします。

おわりに

駒村　感想めいたことをお話ししたいと思います。英さんが強調されたことで印象深いのは、時代が非常に高速度で変化しているにもかかわらず、その時代の変化に好奇心を持ち続けろとおっしゃった。その重要性を、岸井さんの前回のお話を受ける形で、詳細に語っていただいたことが印象に残っています。

実は、この講演をする前、英さんと同窓会の方々と一緒に食事をしました。そのときに、英さんが、お酒も飲みながら興が乗ってきたのか、かばんの中から文明の利器を取り出されました。私はその名称すら分からないのですが、そうそれです。iPadです。

私はiPhoneを持っているのですが、電源をどうやって入れるのかも最初は分かりませんでした。家にテレビがあるのですが、いまだにどこを押せばNHKが映るのか、家内に聞かないと全然分からない人間です。しかし、英さんはそのiPadを取り出して、滑らかに使いこなしている。私は最初それがいかなるしろものかも分かりませんでした。

それだけではありません。生まれてからこれまでのご自分の歴史を、大量の写真とともにインプットして、約七千枚の自分史をその中に構築されていました。皆さんは、僕の子どもの世代で、私はお父さんです。英さんは、私にとって父の世代だと思います。私はそれを見て驚愕し、自分があれをあと何年かかったら使いこなせるようになるのか。恐らくそのうちそもそも使う必要に迫られる仕事や生活から離れ、同時に、関心もどんどん薄れていくと思います。そんなふうではいけない。好奇心を燃やし続けよ。皆さん、常に文明の最先端と伴走できるような力を持たなければいけません。

さらに、好奇心と関連しまして、今日来場してくれた諸君に、その好奇心を刺激するお知らせを二つだけさせてください。一つは、先ほどお話があった『君は自分の国をつくれるか』という本を、スルガ銀行さんのご厚意で百数十冊ご寄贈いただいているので、帰りにぜひこれを持ち帰って読んでもらいたいと思います。憲法の話です。私は法学部の憲法の教員ですが、憲法は国の法です。憲法を語ることは、この国のあり方を組み立てることです。そのヒントが書いてある本なので、ぜひ挑戦してほしい。

もう一つ、お土産の横に一枚紙の案内を配布しています。昨年開催されたハーバードサマーセミナー

（ＨＬＡＢ）の報告会を、今週土曜日の九時半から塾高でやることになっています。これはハーバード大学の学生が日本の大学生と一緒に、高校生を相手にリベラルアーツを学ぶ約十日間の合宿を、本郷にある旅館を借り切ってやる企画です。ハーバードの日本人学生が始めました。

これは一昨年に始めて、昨年二回目をやったのですが、二回目から塾高の君たちの同僚が三人参加しました。彼らに来てもらって、報告会をしてもらいます。それからハーバードの学生、慶應の大学生、東大の大学生、一橋の大学生、上智の大学生も来て、高等学校のみんなと直接話したいということです。

今日は皆さんのおじいさん世代からお話を聞きましたので、ＨＬＡＢ報告会では皆さんと同じ世代の人から、あるいは自己の外向性を高めることを学んでほしいと思います。まだ宣伝が行き届いていないので、多少動員に問題があるのですが、ぜひ挑戦してほしいと思います。

その上で、今日英さんが長時間にわたり、あの壇上で身振り手振り汗みどろになってお話しいただいた。僕はある意味で非常にうらやましく思っていました。英さんが皆さんの先輩だから、皆さんが後輩だから、語れるところがあると思います。

私自身もこの間、会食のときにお話ししたのですが、今、人生のどの時点にタイムトラベルして戻りたいかと言われたら、確実に高校時代に戻りたいと思います。しかし、僕は皆さんの先輩ではありません。皆さんは私の後輩ではない。私は普通の男女共学の公立高校出身です。

今日あれだけみんなに熱っぽく語れるのは、やはり先輩だからです。こういう先輩がいて、塾高の諸君は非常に恵まれていると思いました。私もそうなりたいです。大学に来たら、皆さん後輩になるので、私も熱っぽく語れるようになる。楽しみにしています。

英さん、今日は長時間にわたり、どうもありがとうございました。（拍手）

■ 2012 年度　将来展望講座（第 2 回）　実施記録

実施日時：2012 年 12 月 6 日（木）15 時 15 分～ 17 時 00 分
会場：　慶應義塾大学日吉キャンパス来往舎 1 階 シンポジウムスペース
講師：　英 正道 氏（公益財団法人日伊協会 名誉会長）
テーマ：「君たちの未来、日本の未来」
主催：　慶應義塾高等学校、慶應義塾高等学校同窓会
協力：　慶應義塾高等学校生徒会
　　慶應義塾高等学校フォトフレンズ
参加人数：約 120 名

2012 年度慶應義塾高等学校将来展望講座

2013 年 3 月 25 日発行

発行・編集　慶應義塾高等学校
〒 223-8524　横浜市港北区日吉 4-1-2
TEL　045-566-1381
URL　http://www.hs.keio.ac.jp/
制作　株式会社 アラレス

©2013 Keio Senior High School, Printed in Japan.
無断複製・転載を禁ず